

地歌(上) 越後獅子

作詞 不明、 作曲 峰崎勾当(2)

越路瀉(3)、お国名物さまさまなれど 田舎訛りの片言交じり

白兎(4)なる言の葉に 面白がらし そうなことを

直江浦の海士の子が 七つか八つ目 鰻まで

績むや編み、その綱手とは 恋も心も米山(5)の

当帰(6) 浮気の黄蓮(7)も なに糸魚(11)厭(い)川

糸魚のもつれもつるる 草浦(8)の 油漆と交わりて

末松山の白布の 縮みは肌のとこやらが 見え透く 国の風流を

うつし太鼓や笛の音も 弾いて唄ふや獅子の曲

向かい小山の紫竹竹(9) 枝節揃えて切りを細かに十七が

室の小口に昼寝して 花の盛りを夢に見て候

夢の占方 越後の獅子は 牡丹は待たねど 富貴(牡丹の異称)は

おのが姿に咲かせ 舞ひ納む 姿に咲かせて 舞ひ納む

補注、

(1)複数の歌詞を組み合わせて演奏するのを「組歌」と言い、三味線と箏

(琴)による組歌を「地歌」という。地歌の語源は江戸に対する上方

を「地元」の歌と称することによるもので、「上方の歌(演奏曲)」

の呼称である。無論、越後獅子の歌や踊りは、越後の国から上方

(京、大坂方面)に伝わった。

(2)天明・寛政期(1781~1801年)ごろの上方で活躍した「手事物」

の確立者。地歌や箏曲などの邦楽で、歌と歌の合間に「手を動かして

楽器を演奏する」ことから、「手事」という。「合の手」より長い、

楽器だけの演奏パートである。

(3)信濃川と阿賀野川の河口で囲まれた干潟を越路瀉と称した。

(4)説一は、越後獅子なのだから「し、うた」(ししうた)であったのを、

「、」を長めの草書で書くと「ら」と形は似てくる。そこで、「しらうさ」

(白うさ)と書き誤った。

説二は、しらうさ||知憂の縁語である。

説三は、後段にある「面白がらし」とある言葉の転置であり、「おもしろ

がらしの・・・」と来れば、「しろ」の箇所から語呂合わせして

「しらうさぎ」が選ばれた。

同様の転置は、この地唄を採用した長唄版「越後獅子」では、

「しらうさぎ」(白うさぎ)を「しらうさ」と短縮し、さらに転置して、

説二に近い「うさ〇らし」||「うさ(は)らし」の語呂合わせがなされ

ている。いわゆる、越後地方のシャレた訛りである。(筆者説)

(5)新潟市中央区米山町、寛永十七年(1640年)に信濃川下流右岸を

新田開発した

(6)当帰 四逆加呉茱萸生姜湯の薬草、冷え性の薬

(7)黄連解毒湯の薬草、解熱剤

(8)古志郡草生津(現、長岡市草生津)で、異臭のする石油(臭水)を産出

した。

(9)黒竹とも云い、高さ3~8mになり、茎は成長に従って黒紫色となる。

令和六年六月二十四日

大中臣正比呂 記

